



◆評判を呼んだ
森鷗外らの文芸批評

日本国内には作家や雑誌名を冠する、さまざまな文学賞がある。選考の度に受賞作や受賞者が話題になるが、選考委員たちの作品に対する評価も見どころの一つだろう。

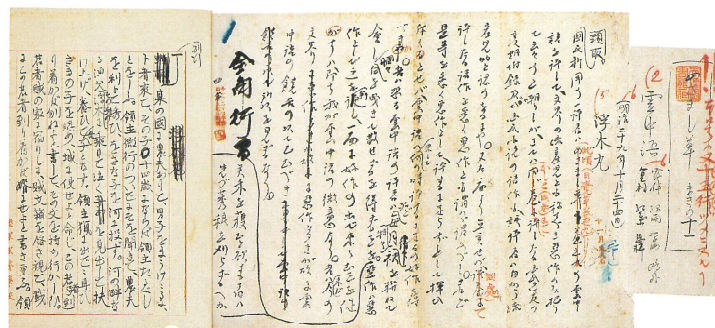
明治二十九年（一八九六）一月、森鷗外は文芸評論雑誌『めざまし草』を創刊し、「作品を評価する」文芸批評を掲載している。

特に、鷗外・幸田露伴・齋藤緑雨の三人による合評『三人冗語』は評判を呼び、後に依田学海・饗庭篁村・森田思軒・尾崎紅葉の四人を加え、『雲中語』と改題されて連載は続いた。

これらの合評の大きな特徴は、評者が「頭取」「ひいき」などを名乗ること、誰による評なのかを読者に分からないようにしていることだ。

天理図書館が所蔵するのは、明治二十九年十月二十四日に催された合評会の原稿である。複数の筆跡が見られるので、評者が誰か分かりそうではある。しかし、他者の評を鷗外が清書しているという説があることなどから、筆跡だけで評者を特定することは難しい。

原稿を見ると、左側の原稿用紙部分で『浮木丸』（合評の対象となった露伴の翻案小説の題）と「頭取」の文字を消し、右側に無地の



▶【うんちゅうご】

1冊

明治29(1896)年

森鷗外等自筆

縦26.0cm 横17.0cm



DATA

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

◇平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

本書は、天理参考館で10月15日～11月17日開催の「漱石・子規・鷗外—文豪たちの自筆展—」にて展示します。

※最新の情報については公式HP、X（旧 Twitter）でご確認ください。